

昨今の厳しい経済環境の中、世界から必要とされている会社が山梨県にあります。

山梨日立建機株式会社代表取締役・両宮清氏は、莫大な費用と労力を注いで、世界で初めてシヨベルカータイプの対人地雷撤去機を完成させました。

両宮氏は二十三歳で建設機械車両工場を起業。90年代にビジネスチャンスを求めて、戦後復興を目指すカンボジアを訪れたことが、氏の転機となりました。当時、カンボジアは戦後復興で市場に活気が生まれ始めたものの、その一方で地雷により被害を受け続ける多くの避難民がいることを知り衝撃を受けたのです。無力感に苛まれて帰国する道中、氏の脳裏に、若い頃に死別した母親の言葉が浮かびました。「陰日向のない人間になりなさい。人のためになるような人間になりなさい」と。その時、「技術屋として何かできないか」と氏は決意したのでした。

帰国後、地雷の勉強を開始し、数カ月後には社内に地雷除去機開発プロジェクトを設置しました。大きすぎる夢とそれに比例する経営リスクに不安を声にする社員もいました。しかし、世界の人々に感謝される仕事をやろうと訴え、社員とその家族を説得したのです。

営業時間外の早朝や深夜、休日を使ってコツコツ開発に取り組み、三年目に地雷の衝撃に絶える地雷除去機が完成したのです。その後も現地を何度となく訪ずれ、現地でメンテナンス可能な除去機の開発を継続したのです。国内外からの技術力の賞賛に対し、無償の奉仕活動ではなかったからこそ実現し得たと、



本業に喜びを得 社会に貢献する

氏は語ります。ビジネスだからこそ真剣に向き合い、ニーズに添った機械を製作することができ、技術指導にも力を注ぐことができたといいます。

社員は世界に貢献する我が社に誇りを持って働き、本業のメンテナンス事業で昨年、過去最高の売り上げを記録しました。勢力的に働き開発につき込んだ費用を回収するには数十年はかかるものの、これからも続けていきたいと、氏は語っています。

創始者・丸山敏雄は「この仕事は何のためにするのか、誰のためにするのか。これまでは、自分の金儲けのため、一家の幸福の為にあり、それが当然だと思い、何の疑いも持たなかった。それが実は、さかさまである。人のため、世のためにと一身に念じて、自分たちは最小限の生活で結構である、少しでも人のためにと思う心……これが事業家の根本に確立されておれば、その仕事は、いよいよ栄えて生きづまりがない。故にこの仕事はあくまで、世のため人の為にするのだという目的がはっきりと立って、いつもでも初心 創業の精神を突き通す、これが繁栄の秘訣である。もし何か故障の起こったとき、まずこの目的に曇りがなければ、くるいはないか、省みるべきである」と綴っています。

厳しい経営環境が続く昨今、早急に取組むべき事項は数多くあります。

映 栗木 栄
会社は何のためにあるのかを再確認し、本業を通して社会に貢献できる企業づくりに努めていきたいものです。